

大学生の「国語力」を語る —ESDとクリティカルシンキング— 実施報告

家井美千子（人文社会科学部）

■本セミナーの概要

この「銀河セミナー」は、2007年8月8日13:30~17:00に、学生センター棟会議室を会場として、岩手県内の高等学校国語教員の皆さんをお招きして開催しました。岩手大学の教育において、学生のいわゆる「国語力」の現状が大学教育でどのような困難を招いているかを学内で確認するとともに、学生の「国語力」向上のためにどのような対策が有効なのか、高校で国語を教えておいての先生方から助言をいただくために企画したものです（肩書き、所属は当時）。



県内の公立高校から13名の国語教員のご参加をいただきました。このような多数のご参加には、この企画にご協力くださった岩手県高等学校教育研究会・国語部会と、同部会長菅原初先生（盛岡南高等学校長）、また同事務局の牛崎学先生（盛岡市立高等学校）のご配慮があり、関係者の皆さんに心からの感謝を申し上げます。もちろん、ご多忙中においで下さり、有益なご助言をくださり岩手大学の教育の向上に貢献していただいた諸先生方に、感謝の言葉を申し上げます。

ご参加は、竹下正樹先生（県立久慈高校）、松尾明日香先生（県立福岡高校）、佐々木裕子先生（県立平舘高校）、佐々木勝也先生（盛岡第一高校）、菊池陽先生（盛岡第二高校）、里舘文彦先生（盛岡第三高校）、牛崎学先生（盛岡市立高校）、小池徳之先生（盛岡南高校）、松本寛章先生（県立宮古高校）、一条節子先生（県立花巻北高校）、桑田哲朗先生（県立黒沢尻北高校）、菊池治先生（県立水沢高校）、上飯坂美保先生（県立大船渡高校）の諸先生方です。まことにありがとうございました。また、一般参加の方にも感謝を申し上げます。

進行は、小島聡子准教授（人文社会科学部）が行い、玉真之介副学長の主催者挨拶の後、コーディネーターを務めた家井（人文社会科学部）が企画の趣旨説明を行いました。

高校教員に、現在の岩手大学生の国語力の現状を知ってもらい、その向上にむけて対策を考えるために意見をうかがいたいこと、さら大学関係者の問題意識が高校教員から見て妥当なものかどうか意見を聞きたい、ということで企画したものですので、先に、大学の各教員から現状報告を行い、それに対して高校教員からの意見、率直な感想をうかがう、という形式で進めました。



大学側の報告は、最初に吉澤正人教授（工学部／工学研究科）が、初年度から専門に至るまでの工学部学生の国語力問題について報告し、次に補足的に西崎滋教授（人文社会科学部）が、理科系学生の基礎教育での状況について報告しました。

また、休憩を挟んで後半は、江本理恵講師（大学教育総合センター）が推薦入試合格者の入学前教育の結果を報告し、ついで文科系の学生の現状として、中村安宏准教授と海妻径子准教授（ともに人文社会科学部）が、特に論文指導における問題点について報告しました。

最後に、家井がこの後実践予定の新科目「日本語表現技術入門」の授業計画を説明し、具体的な助言を求めました。

以下、セミナーの進行に対応して、それぞれの報告に関しての高校教員のご意見、また全般的に「国語教育」についての感想などを、家井がまとめたものでお示しします。（最初の吉澤教授の報告の後に、高校の先生方からかなり充実したご意見をいただいたため、その後の報告に関しては意見をいただく時間があまりなくなった、という傾向があることを先にお断りしておきます。）

■意見交換の内容

1. 吉澤教授の報告（資料1参照）に対して

《高校教員の意見》

▶大学が高校側に何か要求するのであれば、個別入学試験の内容（国語・小論文など）にその要求を反映させるのが最もふさわしいと考える。

大学が望む国語教育は、高等学校だけでなく、小中学校にも拡げていくことが望ましい。

工学部で、学年が進むにつれ入学した段階より国語力が落ちるのだとすれば、それは大学教育に、思考力の養成という点で問題があると考えべきだ。

▶学生の国語力をあげたいのであれば、大学の内部での努力がまず第一に求められるはずだ。

また、国語力の低下に対しては、全般的には高校よりも早い段階での対応が必要だと考える。

実際、高校生には、すでに漢字が書けなくなっている、知識のない生徒が年々増加している。

▶国語力とは論理的な能力でもありと見え、それを向上させるよう授業を行っている。1年生から3年生まで「コラムノート」を準備させ、新聞の切り抜き・要約と感想を書かせ、内容を確認しコメント付きで返却する（毎回では無くまとめて）。しかし、要約はできても、内容を理解しているとは言えない生徒が多い。ペーパー試験には通っても、本質的理解には遠い。つまり、主体的に捉え直すことができない。

かつては教材の言葉や漢字の使用が、現実の生活と密着していたが、今は乖離していると感じる。生徒たちの生活感とリンクしなくなっているのではないか。生徒たちの学ぶ意欲も問題整理能力も、劣ってきたわけでは無いが、子供の生活と無縁のことばかり教えているのでは無いか、と思う。生徒の生活感覚は、彼らと深くつきあわないとわからない。

今の生徒が文を書く時に、読む相手を想定していない。この点で彼らの想像力が減少してきていると、最近強く感じる。

▶高校での国語の授業時間がかなり減っている。このため、今までやってきた方法では生徒に定着しない、ということがわかってきた。

高校以前の中学校のカリキュラムを確認して、その内容にびっくりした。例えば古典は激減している。大学生の文章力に問題があると聞き、「ゆとり教育」の悪影響がでたのだと感じる。じっくり書いたり、読んだり、が不可能になっている。

とにかく、時間がない、というのが今の感想。

▶論理性を養うには、抽象的なものと具体的なものを相互に変換する運動をすることだと思う。

高校の授業は一方的、生徒同士で話し合いをさせた方が良く、と中学校から言われるが、論理性のない発言でも「とにかく発言できれば良い」という考えで良いのか、と思う。実際の話合いの場では論理性はどこかに行ってしまう。

受験校では古典を強化しているが、わかり易い的確な口語訳をするためには論理性が必要だと思う。このような場でも、論理性は鍛えられる。

▶進学校では国語の力をつけるために多くの時間が必要のはずだが、実際は数学や英語重視の中で取れなくなっている。理科系は特にその傾向が強い。その中で苦勞して教育しているが現状ではむずかしい。

県国語研究会の準備で小中学校との交流を始めた所、そのギャップに驚いた。特に中学校では研究授業に「グループ学習」を好むようだが、論理性は置き去りにされていると感じた。教えている側が論理性を理解していないのではないか、と思う。例えば、キーワードをあげさせてもそれをつなぐ、という作業がない。意見を選択させても、選択の根拠は問わない、など。また、『竹取物語』を教材にしている教師が、明らかに『竹取物語』全体を理解していない例があるなど、教師の勉強不足が目立つ。

岩手大学は県の小中学校教員を送り出す側でもあるので、論理的能力の高い教員の養成をきちんと欲していると思う。

▶生徒は年々変化しているので、経験が役に立たなくなってきた。近年は、吸収力はある（与えられた課題はこなす）が、問題設定・解決能力までたどり着けない生徒が多くなっている。加えて、英語と数学が重点化され生徒はその課題に追まわられている。従って、国語の勉強時間は

減少する。

論理的思考力のない生徒は、理科系科目が弱い。

勤務校では、論理的思考力養成のため、発表を重視してやっている。むずかしい言葉を要求せずに、普段の言葉での発表を、1年生から3年間継続的にさせる。このような授業を大学でも、できれば必修として4年間継続して行えば良いのではないか。

▶ノートの取り方は、高校でも板書をそのまま移す、というものが多い。もちろん初めから全くノートを取らない生徒も入る。ノートをとるのも、教師がゆっくり書かないと書き写せない、つまり短時間の暗記もできない。授業進行に差し支えるため、イライラしてしまう。

また、積極的にノートを取る生徒も、それをもとに発展的な質問をしたりはしない。理系のクラスを担当した際に、推薦入試の志願理由書を書かせると、全く日本語にならないので、かなり時間をかけて書き直させるなどの指導をした。各大学に合格したけれども、これで良いのだろうか、と思う。

現実には、生徒の国語力の土壌が根本的に崩壊していると思うし、自分の指導力不足も反省している。

現代文に関しては、評論より小説の方を生徒は好む。抽象的概念を理解できないからだ。また、古典を教える際に敬語が重要だが、そもそも現代語でも敬語が使えないのだから、古語ではいっそう無理だと思う。腹を立てたらきりがない状態。

これまでで効果的だと思ったのは、生徒にプリント書き込みをさせ、その中ですぐれている文章を印刷して配布すると、本人の励みにもなる上に、他の生徒への良い刺激となった。生徒に何かを書かせてそれを評価する、というのは非常に手間のかかることだが、国語力向上のためには不可欠で、これを面倒だと思うようになったら教員を辞めるべきと思う。

▶国語という教科を説明するのは難しいし、「国語力」という言い方には引っかかりを感じる。問題になっているのはむしろ「学力」なのではないか。近年の小中学校ではとにかく発言することを重視しているが、なにごとかを言いつ放しで、結果の評価がないままに終わるのはどうかと思う。

生徒に聞くと、「国語は正解がないのでおもしろくない」と言う。単なる知識だけでは無く、それを構成する力が重要だと思うのだが、なかなか生徒に理解されない。

▶大学生の論理的能力については、最初から文章が書ける学生は、途中で書く力が弱まることはあっても全く書けなくなる、ということはないと思う。

最初から書けなかった学生が、新たな課題に対しては書けない、ということだと思う。

書くための前提として、読む力がある。文章が書けない学生は、与えられた文章を読み取る際、それが少し複雑な構成の文になると、直ぐに読み取れなくなる、というような点に問題がある。文の構造そのものを理解できない。書かれたものを正確に読み取ることが重要だが、それができ

ていない。

自分の試した効果的な教育法としては、文章をゆっくり読み上げて、それを書き取らせる。次に少し速めに読んだものを聞き取らせ、相手が何を言ったのか、その内容を理解させる。といったトレーニングがある。

前任校はいわゆる進学校だったので、余裕がなくてできなかったが、現任校は就職する生徒が多いために、むしろこのような教育が可能になってきた。

▶少し話題と外れるかもしれないが、最近の高校生を見ていると、彼らはそもそも字をどう捉えているのか、疑問になる時がある。例えば「回」を「◎」と書いて、それをどのような場でも通用させようとする。字を書く際に注意力が払われていない。また、字を書く訓練が不足している。平仮名でさえ、他人には読解できない字体でも本人は平然としている、という傾向がある。どうしてこのようになったのか、理解できない。



▶近年、他県から転入してきたが、岩手県のやり方を見て少し驚いている。

進学校に限っていえば、生徒の読書量が圧倒的に少ない。それを補うために朝読書をしたり、読書感想文を未だに課したりしているが、そもそも地域の読書環境が整っていないのではないかな。

書籍が入手しにくいし、図書館の閉館も早く、例えば勤務を終えた親が子とともに図書館に本を借りに行く、といった機会はない。幼いころから読書に親しむことができない。

▶大学の話を聞いて、推薦入試で入った生徒たちの顔を思い出した。今の生徒は両極端に二分化している。推薦入学の学生に対しての、大学の親切さがアダになっているかもしれないと思う。

高校の授業でも、ノートを取ること・メモを取ることの指導がむずかしい。生徒のわかり易さを目指していると、あまりに生徒に優しくしてむしろダメにしているのかもしれない。もう少し高いレベルを目指してやった方が良いのかもしれない。穴埋めプリントなどを作って授業して行くと、生徒の能力は落ちる。大学にはぜひ高い志を保って欲しい。

岩手の高校生を見ると、自分の意見を出すことが苦手である。一方で、小中学校ではグループ学習・プリント学習が盛んに取り入れられているようだが、それが「自分の意見を論理的に発言する」ことにつながるものとは、観察した所では思えなかった。しかし、高校で厳しくすると、「中学校の先生は良かった、優しかった」という生徒からの評価になってしまう。

敬語の使用も恐ろしいほど下手で、早い時期からの教育が望ましい。教育もまた循環するものと考えるので、岩手大学としては、質の高い小学校・中学校教員を出すことをして欲しい。

国語教育に苦しんでいるのは高校だけでなく、大学もだったことがわかり、親近感を持った。

2. 大教センター江本講師の入学前教育の報告に関して（内容に関する質疑応答省略）

《高校教員の意見》

- ▶ 図書情報のまとめを課題として出すのは、岩手大学が求める生徒像を強く印象付ける効果があるので、その意図を明確にして示すべきだと思う。
- ▶ 単なる「読書感想文」は避けるべきだと思う。課題の際に、複数の項目の関係性が提示されていれば、生徒は書き易くなる。

3. 文科系学生の教育に関する中村准教授・海妻准教授の報告に対して

*報告内容メモ：中村報告／レジュメ（資料2）参照

最近、レポート提出において「コピー&ペースト」が多くなってきている。特に、Wikipediaからの引用が激増し、しかも学生はその出所を明らかにしない。そもそも出典を示す、という意識がない。

つまり、自分の意見と他者の意見の境目を知らない。つまり、他者の文章を批判的に読むことができない。大学教育では、自分の考えを確立させるために行っているのだが、それが不可能になってきている。

これに対応するため、自分はレジュメに書いたような具体的な指導を行っている。これも大変時間がかかる。

*報告内容メモ：海妻報告

現在の学生の特徴は、他者の意見と自己の意見の区別をつけにくい、先行研究に直ぐに飲み込まれ自分の意見を見失う、文献に二重の引用があると混乱する、と言ったことがあげられる。つまり、参考文献との距離感を保てない。

ロジカルな思考がもともと苦手であっても、自分の意志と学ぶ要望の強い（つまり、元気な）学生はなんとか論理をまとめて行ける。一方で、まじめながら固定的な思考パターンから抜け出せない学生は、結論だけあって経緯のない論文となってしまう。その両極端だけがいる状態は、指導において大変辛い。結局個別指導するしかない。

まじめな学生が多いのだが、指示通り調査するものの、それを羅列したままで提出してしまう。つまり、知を論理で再構成できない状態。さまざまな学生が混在しているため、やはり個人指導をきめ細かく行わざるを得ない。

《高校教員の意見》

- ▶ これらの指摘は非常によくわかる。同じ気持ちである。

つまりは、教える側の問題でもある。（人は、教わったようにしか教えられないのではないか）

岩手県も全国から見れば貧しいと思うが、その中でも勤務校の地域は、図書館環境も貧しく、さまざまな意味で恵まれていない。

授業の中で、作者と読み手の考えを分けるように教えるべきだが、現場で生徒がそれをきちんと理解するのは困難、と高校教員の間で言われているし、参考とすべき書籍も正しいとはいえない

いことがある。例えば、古典の『源氏物語』を読む際に「作者」と「語り手」を別に考えるはずだが、教員むけの参考書でも、それが間違っていることがある。

おそらく、社会（岩手県）はこのようなレベルである。報告された大学の教員の要求は、高校生にとってはかなり高度なことになると思う。

一方で、大学の指導の様子を聞いて、自分の学生の時とは大きく変わっていて、とても懇切な指導になっていると驚いた。自分もそうだが、多くの高校（中学校も）教員は大学で論文の書き方を教わってきていない（自分でなんとかしてきた）のではないか、と思った。



▶高校生が、具体例とそこから導きだされる意見とを混乱するのはしょっちゅうである。論理的な読解力の教育のために、自分も三色ボールペンなどを使った指導を試みたが、成果は上がらなかった。

論理力向上の教え方がむずかしいのだと思う。教員は自分ではできるので、できない人の気持ちがわからないのかもしれない。どうしてできないのか、を理解しないと教育もむずかしいのだと思う。

4. 今年度新たに開設する授業「日本語表現技術入門」の計画等の報告（家井）に関して・その他《高校教員の意見》

▶グループ学習について批判したが、それは教員側に論理性とは何かがわかっていない場合に危険だと言ったので、教師に理解力があれば良いと思う。

▶今の生徒は、物事を辞書的に理解しても、根源にまでさかのぼって理解するということをしない。以前は、ある程度力づくの強制でそれを理解させることができた。しかし今は同じ方法でやっても不可能。生徒は、その場限りの知識しか身につけようとしない。型通りのことはできるが、それを学ぶ意義はわからないでいる。そして、高校では突き詰めた所まで考えさせる機会が、あまりにも少ない。

授業で時々「何のために」を問いかけ、それについて長く継続的に考えさせなければならない。そうした機会を増やすしかないと思う。自分で話す、相手の話を聞く、そしてそれをまとめる、といった機会をできるだけ多く作るしかないのだろう。

▶このような話題について高校での実践は無理で、やはり大学でやってもらいたい。高校では生徒のセンター試験をいかに良い成績で通過させるか、しか考えられない。

だから、大学は入試でその姿勢を示すべきだし、大学が論理能力にすぐれた人材を求めていることを明らかにすべきだ。特に、前期日程で入れて欲しい。

PISAの結果は、つまり日本の教育全体があその目標を満たすようなことをしてこなかった、ということだし、実際我々はしてこなかった。大学から、教育の変化を起こして欲しい。

また、ピア・ラーニングは大学でこそ可能だろう。高校では無理だ。

▶先ほどの報告で、「大学に入って初めて読書がおもしろくなった」という学生の意見があることを聞いた。高校の読書指導で、「感想文」という枠を超えるにはどうしたら良いのだろうか、と考える。読書を「国語」に閉じ込めないことも重要だろう。読む書籍は「国語」教科内に留まるものではない。読書を国語科に限定しているのが問題だ。現在の「読書感想文」は、むしろ生徒を読書から遠ざけている。

また、文章を書かせることは、その後の対応が大変である。だが、大学で使用しているようなレスポンス・カードであれば、小学校からでも可能である。書かせることについて、もう少し広い範囲で取り扱うべきだと思う。書いたものを繰り返し先生と遣り取りすれば、良いものが書けるようになると思う。教員は、生徒に何か評価や助言をつけて返すことの負担感で躊躇する前に、とにかく生徒に書かせることをした方が良いと思う。

▶評論が苦手であることを克服するためと、将来の志望への展望を持たせることのために、新書1冊について1,000字で感想を書く、という課題を行った。突然長い文章は書けないので、1項目当たり200字で5項目を設定している。生徒全員に2年間で2冊の課題である。

こうしても、生徒は1,000字までの文章がやっとである。長い文章を書くということは、高校ではできていない。大学に入って、事前指導無しで直ぐにレポートを書け、というのは無理で、過大な負担だと思う。レポートも、初歩的な指導がなければ文章は書けないものだ。

5. 一般の参加者の意見

自分は、定年退職後、思い立って小論文検定を受けようと考え、今独学で勉強中。ごく基礎的なことから始めたが、だんだん面白くなってきた。また、社会人になってからでも、気持ち次第で学習を継続することはできる。大学でその基礎を学んでおけば、社会に出ても力を伸ばすことができるだろう。国語力はすべての学びの基礎だと思っている。

■大学側の課題は何か、企画者として

休憩を挟んで3時間以上という長い時間を、「国語教育」について高校教員と大学教員が話し合う、というのは得難い経験であったと考えています。そこで、高校教員の皆さんのご発言を聞いて、大学の教員として改めて気付いたことを以下にまとめます。

まず明らかになったのは、大学教員が直面している困難は、高校国語科教員の感じているもの

とほぼ同じだ、ということです。高校の先生方も「今までのやり方が通用しない」ことを痛感しているようです。これは、もしかしたら中学校でも同じ悩みを抱えているのかもしれない、とも感じました。生徒・学生の変化にどのように対応すべきか、迷いがあるということです。

一方で、中学校・高校の連携の中で、高校の先生方は中学校で行われていることにギャップを見出しています。このギャップは、高校と大学とでも存在するのでしょうか。これらを直ぐに解決する方法は容易には見出せないでしょうが、玉副学長が最後の挨拶にいわれたように、まずはお互いの状況をより具体的に知る、連携して行く、ということが必要だと思われま

す。さらに、高校教育において、「国語」が数学や英語に比べて重要視されない傾向であることの指摘がありました。減少して行く時間で、どれだけのことのできるか先生方は大変な努力をされていることと推定されます。「国語力」が、すべての学力の基礎にあることをより明確に示して、「国語教育」をより重点化するような方策が、あらゆる立場で必要だと思われま

す。また、高校は大学入試対策（特にセンター試験対策）に追われがちであり、高校教育の変化を促すためにも大学入試の内容を改善することも必要でしょう。

高校教員の発言の中の、「生徒は論理的文章の読解を好まない」「長い文章を書く機会がほとんど無いので、書けない」「大多数の生徒には、論理的な読み取りは困難」といった指摘は、大学で教えているものにとっては、かなりの驚きであり、実際司会を務めた小島先生がそのような発言をしました。しかし、高校の国語科教員にとっては共通の認識だったようです。

このことを知れば、特に初年度の教育で「大学生なのだから、これくらいのレポートは書けるだろう」といった思い込みのもとに、安易に課題を与えることを再考する必要があるでしょう。また、もちろん論理的文章力の欠如を補う教育を大学で進めて行かなければなりません。論理的思考力が「学問」の基礎である以上、初期教育だけに留まらず、専門教育でも継続的な能力養成を考慮すべきだと考えられます。

また、地域にもよるでしょうが、岩手県の多くの生徒の読書環境が恵まれていないことにも留意すべきです。（私見ですが、この問題は岩手県に留まるものではありません。地域に書店があっても、陳列内容に明らかな偏りがあるからです。）私たちは軽卒にも、学生に対して「こんな基礎的な本も読んでいないのか！」と呆れて終わりにしがちですが、読書環境には本人の責任ではない原因が多いことを知るべきでしょう。学生への、特に初年度教育には必ずこのことを念頭に置くべきです。もちろん、より充実した読書に導くような方策も必要でしょう。

以上、蕪雑に感想を述べて終わりとしますが、企画者にとって何よりもありがたかったのは、多くの高校の先生から、具体的なお意見をいただけたことでした。この場でいただいたさまざまなお指摘を参考に、9月の集中講義「日本語表現技術入門」を大過なく実施することができました。

大学で、高校までの教育について学生から推測できることは限られています。しかしそれを前提にしないと、大学の教育での方向性を誤る可能性があります。今後も、高等学校の教員の皆様のご協力を得て、大学教育を改善できることは大変多いのではないかと感じた半日でした。

大学生の「国語力」を大いに語る

岩手大学大学院工学研究科
フロンティア材料機能工学専攻

吉澤 正人

1. はじめに

近年、学生の国語能力が低下しつつあることが指摘されている。若者の国語能力の低下傾向の現象は、大学生に限ったことではなく、より一般的な見地からの検討が必要とは思いますが、本稿では、授業や卒業論文の指導で実感されるいくつかの例を通して、私の身近な学生の国語力の問題を考えたい。私は、1年次の「物質の世界（教養科目）」、3年次の「熱統計物理学I（専門科目）」と「固体物理学（専門科目）」、大学院修士課程の「ナノマテリアル工学特論」等の授業科目を担当

している。また、多くの卒業研究生と修士課程院生を指導している。それぞれの授業科目の受講生は重複する部分とそうでない部分があり、日本語能力の比較という点では興味深い結論が導き出されるのではないかと考えられる。ここでは、授業から垣間見える学生の国語力の現状を述べたい。

2. 「国語力」に関わる学生の現況について

「物質の世界（教養科目）」は、全学の学生が対象であり、約7割から8割が工学部、残りは農学部、人文社会科学部、教育学部の学生である。3年次の授業は工学部材料物性工学科の学生、大学院の授業は、工学部の中の応用化学科、材料物性工学科、電気電子工学科、建設環境工学科出身の学生が対象である。一般に、理工系学生に必要とされる国語力とは、

1) 教育

- ・ 授業ノートを纏める
- ・ 実験等のレポートを書く

2) 研究

- ・ 文献を読む
- ・ 実験ノートに記入する
- ・ 実験結果の論理的検討
- ・ 考えをまとめる
- ・ 自分の考えを伝える
- ・ 人の意見を聴く
- ・ 発表を行う
- ・ 論争する
- ・ 論文としてまとめる

3) 日常

- ・会話
- ・事務的な連絡
- ・種々の交渉事
- ・共同作業の打合せ

などがある。授業に関しては、ノートをこまめに取り取る学生がいる反面、授業ノートを全く取らない学生も多い。研究に関しては、研究の打合せや実験装置の操作方法の説明の時に、ノート持参を指示しないとノートを持たない学生も多い。卒業研究の場面では、研究の中身を吟味するより論文の日本語を直すのに手間がかかっているという現実もある。日頃から何かを書くという習慣の欠落が感じられる。

3. 1 年次授業に現れる学生の国語力

「物質の世界」では、人間界と物質界の類似性と相違性をキーワードとして、物質の世界のものの方の考え方を学び、「創発」などの人間界にも共通に流れる根本原理を通して、これからの科学技術のあり方、世界を読み解く方法、人間としてのあり方を考える。この授業では、最先端科学の紹介と共に科学者の倫理や生命倫理についても取り扱っており、理工系以外の学生に対して、現代社会が抱える諸問題を考えさせる内容となっている。成績は、学期の初めに小論文のテーマを与え、授業を通して醸成された各人の考え方をいくつかの観点に従って評価する。ちなみに、昨年度の小論文のテーマは「強い相互作用の下で生きる21世紀の行動原理を考える」、今年度は「物質の世界と人間の世界の類似性の根源と学んだこと」であった。論文評価の観点は、

- 1) 日本語（誤字脱字等）
- 2) 着想（アイデア、独自性）
- 3) 論理（説得力、首尾一貫性）
- 4) 授業との関連性

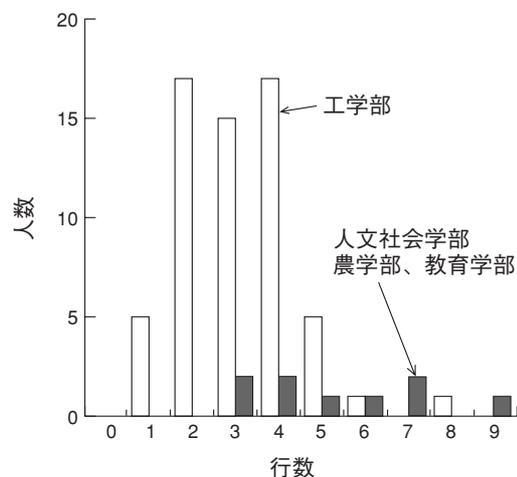
誤	正
過乗	過剰
思い課題	重い課題
親頼性	信頼性
周位	周囲
質本主義	資本主義
行動を初める	行動を始める
臣大な	巨大な
原子暴弾	原子爆弾

である。1) については、例えば、右表のような誤字が見受けられた。昨年度は、論文全般については、論文を提出した37名の内、6名が低い評価であったが、残りの学生については、優に値する内容であった。

今年度の論文は現在評価中であるが、レスポンスカードについて興味深い結果があるので紹介したい。レスポンスカードには12行のスペースがあるが、多く書く人もいれば少なく書く人もいる。右図は、一人あたりの記入する行数の平均値を集計したものである。授業の回毎の各人の記入量は比較的一定であり、回を追う毎にわずかに上昇する傾向が見られた。行数は授業への関心度や「書く」ことへの日頃からの関心や習慣を表したものと考えられるので、「学生の国語力」を測る一つの指標になると考えられる。

全般的な傾向としては、工学部より他学部受講生の方が多く書いているという印象がある。この原因として、他学部生にとって授業の内容が新鮮であり興味深いからであるということも考え

られる。しかし、レスポンスカードの内容を詳細に見ると、問題意識の高さと行数はほぼ比例していることがわかる。さらに想像を逞しくして眺めてみると、工学部の学生は1～2行を書くグループと4行程度書くグループとがあり、さらに、6～8行書くグループがいることが分かる。非常に多く書くグループは、授業の感想はじめ、私が述べた事への意見、日頃から考えていること、授業と関連して最近感じたことまで多岐に渡っている。その意味でも、記入量と内容の豊富さには相関がある。ただし、分布の多相性については、統計の母集団が小さく、単なる想像の域を脱しないことを付言しておかねばならない。



この授業の受講生の受講動機は、半数以上が「超伝導」などの最先端科学への興味からであることが分かっている。教養の科目としてのレベルが高く、人文系学生は当初はとまどうようである。しかし、授業が進むに従い、人間との関わりの要素が加味され、授業への関心度が次第に高まってくることが授業する立場にもひしひしと感じられる。私のわずかな体験から、国語力の育成には、1年次学生に高い問題意識を問う挑戦的授業を行うことが有効であると考えられる。

4. 学年進行と国語力

1年次、3年次、大学院生のそれぞれにレポートを課している。各授業でのレポートの役割は若干異なるので、「公平な観点からそれらを比較することは不可能である」という前提の下で、あえてそれらを比較してみたい。実験を含む専門科目の授業では、事実の整理と論考というプロセスが多くなり、レポート自体は単調なものになってゆく傾向がある。大学院でもその傾向は続くが、私の所属する独立専攻は4つの異なった学科の出身者で構成されており、いろいろな点でモノトーンではないおもしろさがある。私は、ここでは、ナノ材料と呼ばれる非常に小さな尺度の物質や材料について授業を行っているが、その将来性についてレポートの形で意見を述べさせている。最近の目立った傾向は、自分の意見ではなく、例えばウィキペディアなどからのコピー・ペーストでレポートを仕立てるということが散見される。また、毎回、レスポンスカードを書かせているが、ここでも、少なく書くグループと多く書くグループに分かれる。ちょっと悲観的なのは、全く書かないグループがいるということだ。特に授業の内容が自分のレベルに収まらない場合にその傾向が強く現れる。3年次の専門科目については、授業の形態自体に起因すると思われるので、簡単に結論することはできないが、レスポンスカードへの記入は極めて悪い。

以上のことから、工学部に関しては、学年の進行と国語力の向上は共に進んでいるとは考え難く、場合によっては、退化していると感じられる場合がある。レポートの質についても、1年次学生の方が高いと感じられる場合が多い。特に重要なのは、学生に考えさせるレベルにいつも授業の重心を置くことである。学年進行と共に、特に理系科目はテクニカルな授業が増え、学生にものを考えさせなくなっているのではないだろうか。大学は難しいことを教えていれば良いという時代はとっくの昔に過ぎ去っており、国語力の養成と大学の授業のあり方はある意味ではリン

くしていると考えられる。学生のレベルを見据えた授業のあり方の検討が必要なのではないだろうか。

5. 問題点はどこにあるのか？

学生の国語能力については、大学生固有の問題というよりも、現代日本の1つの表層であるという意見は妥当であろう。また、言語の形態が多様であり、さまざまな言葉が生まれるのも自然であるということ認めれば、ある尺度で測られた国語能力の結果を悲観すべきではないし、尺度自体も時代と共に柔軟に変わってゆくべきであろう。一方、工学部学生の国語能力の低下の中には、看過できない部分があることも事実である。その原因の一つには、国語がキライなので工学部に入ったという事情もある。少子化時代に入り、また、理工系離れから、工学部に入る人間の国語能力は加速的に低下しつつある。これは、理工系学生特有の問題といえるかも知れない。

他方、現代のマニュアルレス社会、デジタル社会がそれを加速させているとも考えられる。右に、最近の学生のレポートの一例を示す。箇条書きの思考をそのまま文章にしている例である。学生の頭の中はデジタル化され、思いついたまま文章にしている。これはまだ良い方で、卒業論文全体を箇条書きで書いた学生も過去にはいた。国語能力の低下の一つには、文章を書く訓練、ものを考え、文字の形にする訓練の欠如にその原因があるのは間違いないと思う。

原文

作製プロセスでは、まず、成膜を行う。
薄膜は、カーセル型スパッタリング装置を用いる。

推敲後

カーセル型スパッタリング装置を用いて薄膜を作製する。

6. 結びに代えて

国語力は日常的に用いている能力であり、日本人であれば、それを使えない人間はいない。だから、普通に国語能力の向上という言葉を使えば、それは高いレベルでの能力の向上を意味し、理工系学生においては、ことさらその能力を上げる必要を感じられないのが実態ではないだろうか。

ここで見逃してはならない重要な点は、「国語能力は論理能力に結びついている」ということである。論理能力を一定の水準に保つことは非常に重要であるという意味で国語力のレベルを保つこともやはり重要な課題である。1年次学生については、一部の学生の国語能力はかなり落ちるが、全般的にはそれほど悲観したレベルではないと考えている。これは、受験勉強の効果がまだ残っているからと考えることもできる。難しい評論や難解な文章を読みこなすことは、論理能力を育成するという観点から、10代から20代の一時期にとって貴重な体験である。大学受験の中での国語の位置づけは、他教科とは若干違っていると考えられるが、受験勉強の枠内で若者の国語能力の維持・向上という役割を担わせるのは、現在の受験社会の中では難しい問題であろう。簡単には解決できないかも知れないが、考えてもらいたい課題でもある。大学が受験生に求める国語力の中身を考え直せば、その機運は生まれるかも知れない。

私が個人的に関心を寄せているのは、大学に入ってから国語能力の低下の問題である。入学後の能力低下については、卒業論文の文章のレベル、学年進行による小論文のレベルの変化から、

それはあるのではないかと密かに感じている。これを解決するためには、日本語能力の技術的な講習に加えて、問題意識を持たせること、書く習慣をつけること、書くことの重要性を植え付けることを体系的に取り組むことが必要なのかも知れない。

今年から基礎ゼミナールで新生と直に話す機会が増えた。私の担当した学生は3人ともしばらく本を読んでいないということを知り大いに驚いた。視覚的なメディアが主流の社会においては、本を読む習慣を求めることは難しいが、その必要性と重要性を訴える必要もある。理工系学生にとっては、数式という最強手段があり、また、研究者に至っては日本語はマイナーな言語である。その意味では、英語がそうであるのと同じで、日本語も、最低限の意志が伝えられる道具にいずれ成り下がるのかも知れない。そういう状況の中で、国語能力の重要性は分かっているとしても、それを取り上げて、何かやろうというのは現実には非常に難しいのかも知れない。他方、表現力の豊かさや自分の主張を強く訴えること、問題意識を高く持つことは、社会に出てから重要となる。理工系学生に求められる「簡潔に書く」ということは、現状では短絡した意見を述べたり、首尾一貫していない文章の形で現れている。本質を漏らさず書くことも是非学生に学んでもらいたい事である。何らかの対策があれば望みたいところである。

大学生の「国語力」を語る—ESDとクリティカルシンキング—

話題提供： レポート・卒論の添削指導より（中村安宏）

1. 学生に求めているもの

- ・ 研究書（論文）などの切りはりではない。個人的な卒論・独創的な修論
- ・ ①史（資）料の精読をとおして、②研究書（論文）の問題点・欠落点・論文を指摘し、③それを踏まえて自分の見解を明解に述べる。（批判力を養う）
- ・ 構成
 - (a) 題目の設定理由・課題・目的
 - (b) 研究書（論文）の整理検討
 - (c) 史（資）料の分析
 - (d) 結論

2. 実態

- ・ 研究書（論文）の見解と自分の見解とが不明確・未分離（批判力は育たない）
（例）〇〇は次のように述べている。……と私は思う。
- ・ 研究書などの切りはりに終わっているものもある。
- ・ Webページの利用増加 Wikipediaなど（とくに現1年生）

3. 対策（批判力を養う〈すぐには難しい〉ための基礎として）

- ・ レポート・卒論作成のために参考にすべき二種類の図書を区別
史（資）料と研究書（論文）
- ・ 文章末に参考文献の列挙ではなく、注として記載させる。
- ・ 研究書（論文）や史（資）料を引用する場合は、はっきりそれとわかるように記述し（「 」や二字下げ）、著者・書名・巻・出版社・年（月）・所収・ページ数などを明記するように指導。